私の山村での生活と縮小社会

大今歩

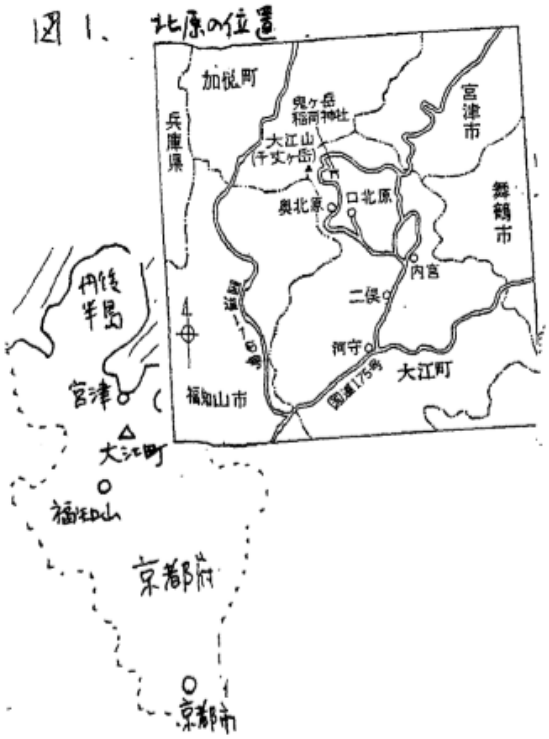
はじめに

私は大阪の府立高校の教員をしていたが、自分が食べるものは自分で作りたいと思い、野菜作りに興味があった。豊中市や箕面市が提供する市民農園や家の近くの農家から借りた畑で一年中、野菜を作った。特に一年中必要な玉ねぎやジャガイモの栽培には力を入れて野菜はほぼ自給していた。

しかし、米を作る田は借りれない。それに果樹を植えたい。何よりも農村の中で暮らしたい。そこで、農山村への引越しを目指して妻と空き家探しを始めた。そして大変風景が美しく、日当たりのよい山村で古民家が見つかった。私は高校教員を辞めて引越した。いか、私の山村生活について述べたい。

（1） 山村への移住

私は 1990 年 36 歳とき、現在暮らす京都府福知山市大江町北原という山村に大阪府豊中市から家族(妻と子供 2 人)と共に移住してきた（大江市北原の位置、図１）。以後、大阪の予備校や地元の高校に勤めつつ、週のうち 3、4 日田畑を耕す生活を続けている。私が山村を選んだ理由は次の通りである。



現在、農業は著しく工業さされている。稲作においてもトラクターで耕うんし、田植機で苗を植える。生育期には除草剤を撒いて除草の手間を省き、農薬を散布し病虫害を防ぐ。収穫はコンバイン（稲刈りと脱穀を同時に行う）で行い。籾の乾燥や籾すりは地域の農協に任せる（自分の収穫した米の重量は配給されるが、その地域の誰が作った米かは分からない)。

田園は石油頼みの工場で１つ１つの稲の生育は見えない。田圃やその周辺の生物は激減してきた（私が幼い頃、どこにもいたメダカやドジョウは全滅した)。農薬は農民や消費者の健康も脅かす。

平地の農村に引越したのではそうした工業化された稲作から抜け出せない。圃場整備をしていない田があり、昔ながらの稲作が可能なのは山村しかないと考えたからである。

北原は過疎、高齢化の山村で、かつては 60 戸を超える人家があったが現在は７戸、住民は 12 名、そのうち 80 代５名、70 代２名、60 代４名、50 代１名という典型的な限界集落である。

かつては美しい棚田が多く営まれていたが、今は杉や檜の植林や休耕田が増えた。休耕田については荒廃化を防ぐため、中山間地直接支払制度による補助金を得て集落内の住民だけでなく近隣に移り住んだ住民が除草・耕うんを行ったり、自治会活動への参加を促すことで集落が維持されている。

（2）山村の暮らし

①自給自足的生活

北原に引越してからすでに 27 年が経過したが、自給自足的な生活ができてきた。無農薬で田畑を耕すことに

より米や野菜はほぼ自給できる。また、大根やブロッコリーなどの葉で青汁を作れる。不作の野菜は近隣の農家からいただく。魚や鶏肉は購入しているが、焼き物の調理は七輪を用いて炭火で焼くのでとてもおいしい。便所は汲み取り式でひしゃくで汲み取った肥えを果樹などにかけるなどにかけるので夏みかんや梅、ざくろが毎年たくさん収穫できる。

生ごみはコンポスターという、ふたができて底が抜けている容器で約半年分処分できる。そして腐った生ごみは堆肥として利用できる。コンポスターは都市でも庭に土さえあれば使用できるのでおすすめである。

山村で夏は涼しいためクーラーは必要ない。特に暑い日だけ扇風機を用いる。冬の冷え込みは厳しいが石油ストーブで暖をとる。部屋が暖まるうえ、お湯が沸いていて湯たんぽなどに利用できる。冷暖房に電気を用いないことで使用電力量を大幅に減らすことができる。

お風呂は太陽熱温水器を用いて湯を沸かしているので冬でも晴天であればかなり暖かく、夏など5回でも熱いお風呂に入れる。五右衛門風呂で晴天以外の日は周りにいくらでもある雑木でつくる薪で沸かすことができ、体のしんまで温まる。

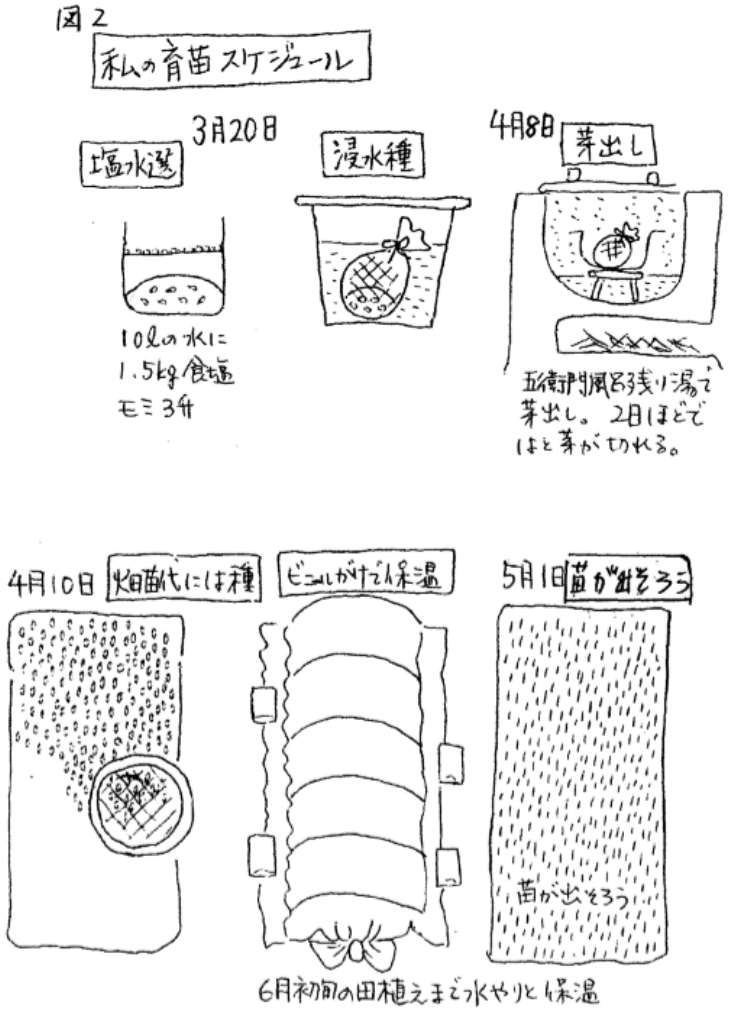
②私の稲作

27年前にこちらに引越して家の周りの5枚の棚田を借りることができた。毎年、無農薬・無除草剤で約12aの田で稲作を続けている。次に私の稲作のスケジュールを紹介したい。

私は井原豊さん(故人)の「痛快イネづくり」、宇根豊さんの「減農薬のイネつくり」(ともに農文協)や「有機農業の事典」(三省堂)などに学びつつ、近所の農家からこの地にあったやり方を教えてもらいながら米作りを続けてきた。

まず、3月20日頃、前年に採取した種モミを塩水選して浮いた種モミを除く。その後種モミを3週間ほど水につける。そして、播種の前日、五右衛門ぶろの余熱を用いて催芽する。

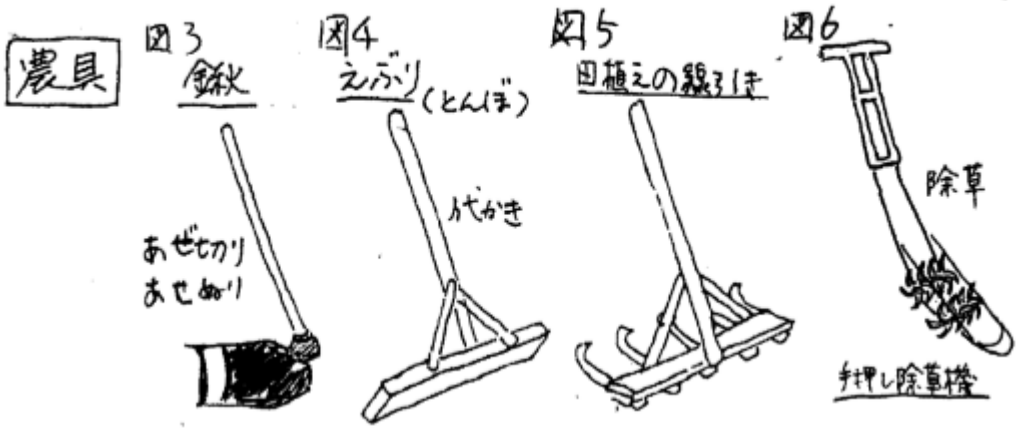
4月10日頃、畑苗代に播種する。この時期はまだ気温が低いので、ビニールがけして生育を促す。5月上旬に芽が出そろうが、気温の高い日はビニールをはずす。こうして5月下旬には約20cmの苗ができる。(図2「私の育苗スケジュール」)



一方、5月中旬ごろから田ごしらえを始める。まず、前年の秋に播種してきれいに花を咲かせたレンゲを刈って元肥えとする。鍬（図3）であぜ切りを行って、水を入れつつ、堆肥や前年の稲ワラを田にまく。水がたまると、耕うん機を用いて荒おこしをしてあぜぬりをする。数日後に耕うん機で代かきしてえぶり（図4）で田を平らにならす。

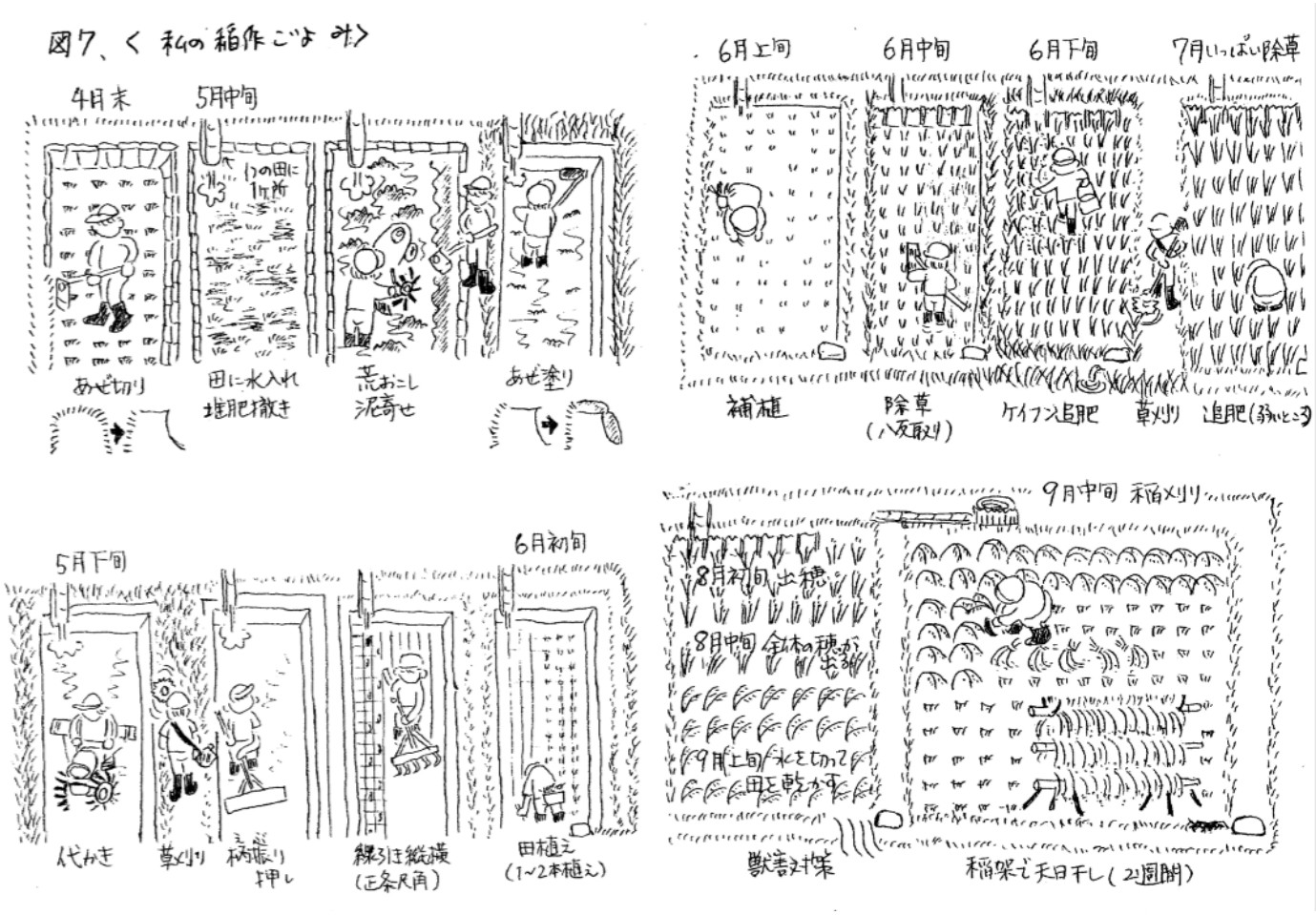
6月初旬、田植えの前日、線引の道具（図5）を用いて縦横に1尺（約30cm）間隔で線を引く。田植えはできるだけ1，２本植えとする。消えてしまう苗もあるので、6月中はずっと補

植を続ける。そして6月中旬以降になると、雑草（コナギなど）がはえてくるので、除草機（図6）を押す。稲苗と同じような姿をしており稲より強いヒエは手で抜いていく。6月下旬には追肥として、鶏糞をまく。雑草が次々にはえてくるので、7月一杯はできる限り毎日除草を心がける。



8月上旬には出穂してくるので穂を痛めないように、もう田には入らない。そして9月上旬に稲が黄色く色づいてくると、水を切って田を乾かす。9月下旬から鎌を用いて稲刈りを始めて稲架にかけて天日干しをする（図7「私の稲作ごよみ」）。そして10月上旬、脱穀（穂から籾を落とす）を行い、種籾を紙袋に入れて保存し、必要に応じて籾すりをする。いつもおいしいご飯が食べられる。

ずっとこのような稲作を続けてきたが、2016年は約12aの田んぼで約420kg（約7俵）が収穫できた。これまで私や家族・友人を含めて10人分の米をまかなってこれた。無農薬でやってきたが、病害虫の被害はこれまでほとんどなかった。稲は他の作物に比べて収穫が安定している。

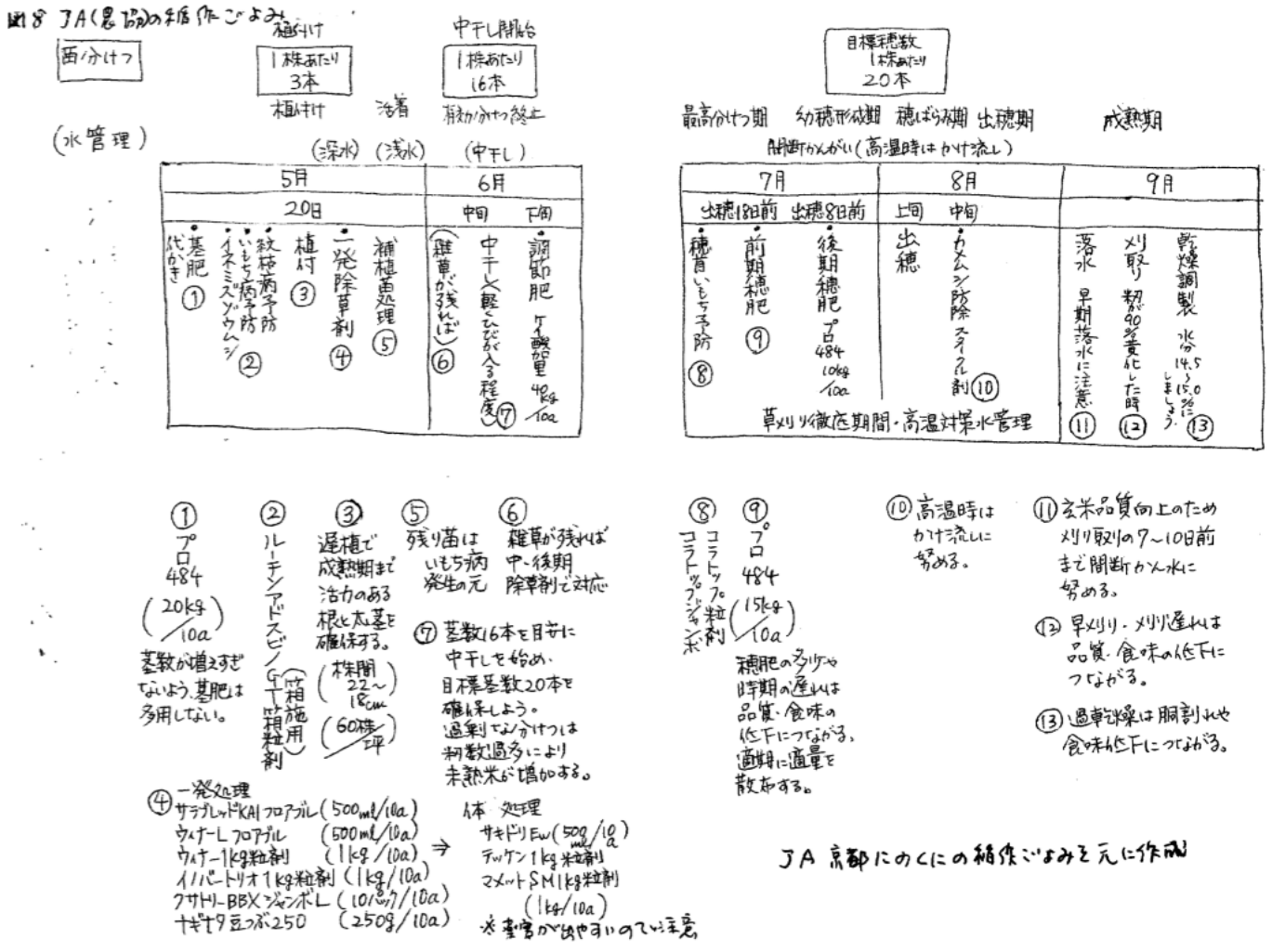


③JA の「稲作こよみ」の問題点

JA(農協)は TPP など米の輸入自由化に対抗するため、育苗期に農薬を集中するなど、従前に比べれば農薬や除草剤の使用を減らそうとしている。しかし、図８をご覧いただければわかる通り、「稲作こよみ」（JA 京都にのくに配布をもとに作成）は事実上「農薬・除草剤こよみ」である。そして農薬・除草剤には人や生物に有害なものも少なくない。たとえば、JA も薬害が出やすいと注意する除草剤マメット SM は養殖ゴイを大量死させるなど魚毒性が強いことで知られている。

また、「稲作こよみ」がすすめる慣行農法にも疑問がある。例えば 6 月中旬の「中干し」である。「中干し」を行うことにより、過剰な分けつを抑えようというのである。

私は 27 年間の稲作で「中干し」をしたことがないが、減収につながっていないと思う。一方、「中干し」を行うと水田に生息するカエルの子であるオタマジャクシは皆死んでしまう。北原では、珍しいモリアオガエルが生息しており梅雨時には田の周りの樹木にたくさんの卵を産みつける。綿菓子のようにみえる卵がかえるとオタマジャクシとなって田を泳ぎまわる。そして、モリアオガエルとなりそのかわいらしい姿を見せて心をなごませてくれる。それにカエルは虫害を減らしてくれていると思う。



（３）山村の抱える問題―獣害の深刻化―

山村の抱える最大の問題は過疎高齢化である。それに加えて鹿や猪の獣害が深刻であり、山村の存続を脅かしてしる。鹿は大根や白菜などを食べ尽くす。猪はイモ類や稲が好物である。そして共に里に降りてくる個体数が近年急激に増えている。例えばこちらに来て府道から北原に入る川沿いの約 4km の林道で最初の 10 年間は一頭

の鹿にしか出会わなかったのに、今は毎晩大小さまざまな鹿や猪に 10 頭以上も出会う。

獣害にそなえて 15 年ほど前から集落のまわりに電気柵を設置してきた。初めは効果があったが、数年たつと、鹿は柵を飛び越え、小さい猪は柵の下をくぐり抜け、作物の被害はなくならなかった。

日本中で獣害がひどくなったため、政府予算により防護柵（フェンス）の資材が無償で配布されることとなり、北原でもフェンスを設置したため、獣害はかなり減ったが、柵の低い場所を飛び越えてくる鹿は油断できない。

獣害の増加の背景には山林の減少・荒廃化と猟師の減少がある。獣害が増加すると耕作意欲を失わせる。ひいては山村の存続を脅しかねない。山村の過疎・高齢化が獣害を広げ、獣害が山村の過疎化に拍車をかけるという負のスパイラルを断つため、獣害対策を早急に進める必要がある。

（4）農的暮らしのすすめ

市民が皆農することができれば縮小社会実現に結がる。しかし農耕しなくても農的な暮らしは可能である。私は農耕に加えてたくわん、白菜漬けなどの漬けものやもやし、こうじやみそ造りなど、農産加工を行っている。また庭でとれる梅やかりんなどの果実酒をつけたり、柿で柿酢をつくり家の周囲にいくらでもあるドクダミや柿の葉などの薬草茶を作っている。このような農産加工を含めて農業と考えている。

このような農産加工は GDP の増加にはほとんど寄与しない。しかし暮らしの豊かさを確実にもたらす。しかも都市生活でも十分実行が可能である。

縮小社会への移行のためには農的暮らしの拡充がどうしても必要であると考える。